

ゲーテの『W・マイスター遍歴時代』

における小箱の象徴性について

佐 竹 正 一

一

ゲーテの詩作を現象学的に考察できる可能性として、エッカーマンに語ったというゲーテの素朴な言葉に出発点を求めてもよいのではないだろうか。彼が、発表したすべてのものは、大きな告白の断片にすぎない。⁽¹⁾告白された作品は、体験された詩作である。「私の詩はすべて機会詩である」⁽²⁾詩作に動機と素材をあたえるのはゲーテにとって現実なのである。現実の事象であったから、体験された事象として、思考概念のように統一をあたえることをせず、体験されるまま断片として表現されたのである。

詩作の動機は体験に含まれている。その詩作には体験された圏内から、告白という形でひとりでに展開したと考察できる領域がある。現象学的な考察可能な領域とは、そのような詩作体験の圏内に属している。その圏内に体験された事象、詩作された現実を確かめようとすれば、『遍歴時代』の問題との関連でみれば、どのような実例が現われてくるのだろうか。W・エムリッヒが、同作品の象徴性に言及して、その「沈黙性」に着目したのは、現象学的考察に一方を

示しているように思われる。⁽³⁾ゲーテは、文字と語の響き（音声）と意味との関連を、モンターンにこういわせている。「文字は素晴らしいものかもしれないが、響きを表現するにはいたりません。響きを欠くことはできないが、それとて本来の意味を伝えるにはとても十分ではありません」⁽⁴⁾小説の中で語る本来の意味とは、彼が鉱夫として、彼の係りあう山岳、岩石のもつ秘密であり、それはゲーテの花崗岩シンボル等で知られるものを指している。このようなモンターンの言葉から、エムリッヒは、ゲーテにとって公然の秘密を告げるとされた岩石の象徴には本来の意味を表わす文字や響き（音声）が欠けているので、その象徴性には「沈黙」が纏りついているというのである。つまり意味する文字と意味されるものとは沈黙によって切断され、文字は仮象性をおびるのである。文字や音声には仮象性という問題が介在していて、文字や音声は、それ自体では沈黙し、内容が空虚なのである。しかし本来の意味を伝える文字や音声は、沈黙して、十分な機能を果さないといっても、本来の意味は、この場合モンターンによって体験されているのである。もしそれが体験

されているのであれば、沈黙する仮象性をこえて語りかけてくるものがあるはずである。その結果、象徴の沈黙性から、「事象そのもの」へという現象学的な方向がうたがされてくるのである。文字（記号）や音声はそれ自体では沈黙して、内容の空虚な仮象性にすぎないにしても、それらが関連するはずである体験された事象が現象学的に考察されるならば、その空虚な仮象性は、単なる記号を超えて、他を志向し、志向した内容を還元する意識＝体験の機能を果すはずである。『遍歴時代』の象徴性には、そのような現象学的側面があると いわなければならないのである。

『遍歴時代』の象徴には記号（仮象）としての文字を超出している客観的イデア的な「事象そのもの」という超越論的な要素が当然問題にされなければならない。モンターンはその超越論的な要素を沈黙の彼方に文字の解説によって、事象そのものとして読みとらなければならない。しかしもとも「事象そのもの」という問題で、フッサールが、文字や語の響きを「還元した」後で、それを導びき出すとは考えていないであろう。J・デリダは著書『声と現象』の中で、フッサールの表現問題を論じながら、記号のもつ指標と表現の二重の意味は指標作用が還元されなければならないと述べている⁶。しかし表現に用いられる文字そのものまでも捨象されるかといえは、それは疑問である。表現とは別な指標作用には仮象があるのであって、その仮象性は根拠づけられなければならないという仕方で還元作用が問題にされるのである。それはともかくとして、フッサールが現象学的な分析として実行したのと平行に、意味するはずの文字や響きと、意味される客観的な存在との間を「沈黙」によって中断し、それをエムリッヒが、『遍歴時代』の象徴性と解釈した点

は、現象学的相連性と相応している⁷。その解釈は単なる偶然ではない。彼は現象学的な観点に立って、象徴における沈黙の問題を提起しているのである。その現象学的な観点において、文字の仮象性が根拠づけられ、自然の秘密が解説されることは沈黙した仮象性が還元されることに外ならないのである。

以上の論点から、『遍歴時代』の象徴性の問題は、象徴するものと象徴されるものとの間に沈黙が介在しているために、その沈黙性が象徴するものの仮象性を生むので、象徴されるものとしての体験された事象を現象学的に考察しなければならないことが明らかに思ったと思う。しかしそのような現象学的な象徴論がいっそう徹底しているのは、文字や音声捨象・還元されて解釈される山岳、岩石シンボルの場合よりも、これから考察しようとする小箱の象徴性の場合である。なぜならば山岳や岩石ならば自然の存在として、それ自体自律する根拠をもっているもので、その内容は文字や音声を越えて、具体的に示されているからである。それに対して小箱の場合は人工的に制作されたもので、それ自体直接自律する自然の要因をもっていない。それで小箱の内容＝事象を明確にするためには、それを何か他のものに依存しなければならないのである。岩石シンボルとして、意味するものと意味されるものとの間に沈黙が介在している、両者の関係がそれによっていったん停止されることを述べたが、その問題は小箱の象徴性にそのまま妥当するだけでなく、この場合は自ら自律する根拠をもたないので、象徴するもの（記号）と象徴されるもの（意味）とは全く別々なものであると考えなければならないのである。だから意味されるものの、体験された事象が、岩石シンボルの場合よりもいっそう強く要求されるはずである。

従って現象学的な観点は、この小箱の象徴性を解明するために準備された立場なのである。小箱という容器と中に置かれるはずの内容とは全く異なっているのに、意味内容が体験された事象として展開しないかぎり、小箱の容器としての外観（記号）は空虚なままに解説される術がないわけである。

外観が黄金色に輝いている小箱は、体験された意味内容が解明されないかぎり、たとえ蓋を開いてみても中は空虚かもしれない。なぜなら、人工的に制作された小箱は、外観だけで判断できないわけであり、それ自体中に置かれるものと全く異なっている。そしてこのような相違性は、岩石シンボルにつき纏う、仮象としての文字と本来の意味との間につき纏う沈黙の問題とは全く異なるものであり、自然との内的連関をもたない小箱は、記号と意味の相違性を論ずるかぎり、岩石シンボルの場合をつきはなしてしまふ。特に小箱における相違性を規定して、フッサールが現象学的相違性として考察したのに相応して、小箱における現象学的相違性と呼んでおきたい。そこでは、自然存在のように内的必要性をもたない小箱の仮象性は避けられないのであるが、現象学的に規定されることによって、その相違性は、仮象の空虚性が、志向作用をなして、空虚性が、意味、内容で満たされることを求めないではおれない。本来空虚である志向性は、小箱の仮象性とあいまって、空虚な小箱は志向的体験作用によって、意味内容が満たされるはずなのである。

小箱の象徴性における、象徴するもの（記号＝外観）と象徴されるもの（意味＝体験された事象）の相違性こそは、現象学的相違性と規定されるべきものであって、その相違性は、同一地平に現象学的統一性を予定しているはずなのである。そこでは外観という仮象

は、体験された事象と切り離すことができなくて、両者が同時に問題にされなければならないであろう。そのような小箱の象徴性についてもう少し詳しく検討してみようと思う。小箱においては、容器と中に置かれる内容とは異なるので、象徴が可能になるためには、象徴を形成する動機のことを考えなければならない。そのような動機は、詩作の動機として、体験＝直観のうちに含まれていたものである。そのような体験に含まれている動機、具体的に言えば、直観される原現象の体験によって、外観と内容の相違性が超越的なものとの係りあいとして、つまり現象学的相違性が、仮象も含んでいるが、その仮象を還元する一種の判断中止を行う。それで体験された事象に外観＝記号という指標作用が、還元されるのである。そのような還元され方において、小箱は人工的に制作されたものであるから、自律している自然との内的連関によってではなく、その象徴性は自己構成的になさなければならない。また逆に自己構成されなければ、象徴は成立しないのである。だから小箱の内容を考えてみると、それは中に宝石が置かれているように、入っているのではない。それは存在が意識の中に内在すると同じ仕方で、かかわりあっているのである。この点において、小箱の象徴性は岩石シンボル等によって代表されるゲーテの自然存在の象徴性とは、立場を異にするものである。

小箱は外観と内容とが異なっているので自然存在とは異なり、人工的に制作されているので、超越的なものとかかわりあう時には、現象学的相違性において、自己構成的に象徴機能を果さなければならぬ。では一体その自己構成されたものとは、つまり比喩を以ていえば、蓋を開けて中から、宝石を取りだすようにはできない小

箱の内容とは、どのようなものだろうか。これをゲーテは、象徴論的にこういつている。「象徴は現象を理念に変え、理念を形象に変える」つまりゲーテにとって、象徴とは理念と関連する形象に外ならないのである。そのような形象は小箱の場合自己構成的に形成されたものに外ならない。この場合の自己構成的というのは、小箱における外観と内容の現象学的相違が、小箱の象徴作用において、現象学的統一性としての形象を理念との関係において形成する。つまり形象が、外観と内容の相違を超えて、小箱においては自己構成的に現象学的統一性を可能にするのである。つまり先に規定した現象学的相違性は、空虚＝仮象性をもっているが、それを還元しうる可能性をもっているのであり、現象学的統一性をもともと前提にしていたのである。そのようにして理念と結びついた形象は主観（志向性をとまなう空虚）と客観との関係を超えた根源的な事象である。すなわち、外観と内容の相違によって二分された外観という主観の立場と、内容という客観的な存在とを同じように貫ぬいて流れるものがある。そのような流れに貫ぬかれることが、自己構成的として、現象学的統一として、考察された小箱の可能性なのである。

小箱の自己構成作用は詩人の内的必然性に従って、体験され、意識のなかでおこる。外観と意味が全く異なるものであるから、外観の空虚（仮象）性は、内的に体験されて志向性をもち、志向された対象は意識において、理念と関連する形象が構成されるのである。そのような現象学的な観点においてでなければ、小箱の象徴性は、本質的には解明されないものである。一見したところ、ゲーテの描写によると外観は黄金色に輝いているが、小箱の蓋は開けば簡単にできそうであり、決してこちらからは開けないのである。小箱はそれ自

体蓋が開くようにそれに沿って行動しなければならないのである。それを開く鍵は、その秘密を知っている老人に外ならない。老人によって表わされていることは、体験者ということである。その暗示は、小箱を経由して、外界に問題の所在があることを示している。つまり小箱は、そこから離れることによって、蓋が開くのである。この離れは、外界を指示する志向性に外ならない。その志向性によって、本来空虚なはずの小箱が、外界に依存することによって、客観的イデア的な存在を確認するのである。

小箱においては外観（容器＝記号）と中に置かれるはずの意味内容とは異なっているので、その相違性は仮象を生み、容器が空虚であると考えられる。その空虚な仮象性が根拠づけられるために、外界を志向する体験が、志向された内容を意識において、捉えなおす機能を象徴の動機とれば、『遍歴時代』の象徴性には、そのような象徴の動機が問題にされなければならない。この一種の判断中止という象徴の動機によって、往年シラーに語ったという、原植物を目で直接捉えるのだというような直観の問題は、還元作用を受けなければならない。そのような原現象には、直接直観によって超えられない仮象性の問題があるのであって、その空虚性を根拠づけるためには、判断中止という還元作用を受けなければならないのである。すなわち小箱の外観と内容の相違性が、還元作用という判断中止が必要なのと同様に、理念としての原植物は、ゲーテにとって仮象をもつに外ならないから、原植物の体験を通して、外部から超越論的に、原現象を構成するという方法で根拠づけなければならないのであつたのである。現象学的に考察すれば、体験を通して、仮象性は志向性をもつのであり、還元されて、仮象の空虚性が根拠づけられるはずなので

ある。従って当然そのような象徴論的態度からすれば、註解者のE・トゥルンツが述べているように、前述の岩石シンボルの沈黙性について、文字から語の響きを経て上昇し本来の意味にいたるというような図式的向上性によって、この問題が考えられてはならない¹²⁾。この場合も小箱の例にならって、意味するものと意味されるものとは、前述の象徴の動機によって、象徴するもの（記号）と象徴されるもの（イデア的客観的存在）の相違を超えて、現象学的に根拠づけられるのである。文字と意味は語の響きによって克服されるのではなく、沈黙によって判断中止され、エポケーとして象徴の動機が体験されていると考察すべきである。またエムリッヒがトゥルンツを批判して、小箱が空虚でないとしているのも、前者の現象学的な立場に対して、後者は向上性を主軸にした世界観に立脚している相違点によるものである。小箱は決して空虚であってはならない。しかし中味は、蓋を開いて、中に置かれている寶石を指先で取りだすようには、扱うことができない。それは体験された内容であり、意識の中に内在する存在に外ならない。だから小箱は空虚にみえて、空虚であってはならないのであり、象徴するものと象徴されるものが、自己構成的に、両者の相違性から、現象学的統一としての形象を形成してゆかなければならないのである。小箱は空虚ではない。もし蓋を開かないで証明できないではないかといえは、もし空虚なら、その仮象的空虚性は、志向性をもっていて、志向性はもともと空虚なのであるから、外界とかかわりあって、意味を構成してゆくと考えなければならない。

K・ハンブルガーは、著書『詩作の論理』の中で、フッサール＝インガルデーンの考えを斥けながら、自分の（現象学的）立場とし

て、ゲーテのいう「現象」そのものという問題性を考察している¹³⁾。しかしその「現象」は、ゲーテの場合でも一度は判断中止され、還元作用を受けなければならないだろう。つまり前述した象徴の動機が、小箱の場合に限定されるのではなく、この場合も無視されてはならない。『遍歴時代』の象徴性として、小箱の場合を考察した。象徴の動機は、外観と内容の現象学的相違性によって生じるエポケーの存在を述べたが、それはもともと原現象（直観＝体験）の規定のうちに含まれていたのである。それは同時に倫理の意味をかねそなえた諦観という言葉のうちに読みとれる。『箴言と省察』の中で何度かくりかえし述べられる原現象の説明のうち、次の規定だけは、『遍歴時代』にも載せられている。「ついに原現象に際し心を落ち着けるなら、それは諦観に外ならない¹⁴⁾」ここで前述した象徴の動機と原現象＝諦観との関係をいえば、象徴の動機とは、原現象の、主観的な側面であり、原現象という名称自体が客観的イデア的側面を表わしている。原現象というとき、主観的な側面が隠れて、客観的な側面が強調されている。諦観とは、原現象にかかわる人間の客観的な側面を表わしている。また『遍歴時代』の副題が「諦観者たち」というのであるが、諦観と結びついた原現象の規定が、ここに載せられているのは、そのためである。原現象によって規定された諦観は人類の限界に達して自己を放棄するというのであるが、これは一種の判断中止であり、態度の変更であり、象徴的態度である。その場合ゲーテにとっては認識の問題は倫理性と一つになっている。これまでモンターンの提起した岩石シンボルの沈黙性や小箱の厄介な象徴性を認識的な問題として考察してきたが、勿論それは同時に生き方の問題でもある。事実『遍歴時代』の行動の概念は、モンター

ンによって山岳の中から人間社会に向って、ヴェルヘルムに説かれるのである。⁽¹⁶⁾ また小箱は息子のフリーックスに諦観の問題で深くかわりあっている。

ゲーテの原現象とフッサールの本質直観の類似性について述べているのは、H・シュミッツである。⁽¹⁷⁾ 直観の問題をめぐって両者が類似性をもつと考えられるが、しかし両者の間に異なる点はないのだろうか。この論点で、インガルデーンの主張が参考になるように思われる。それは、「根源感情」による態度変更によっても、美（学）的体験ならば、事態はフッサールの場合のように中和化されることがないという考察である。⁽¹⁸⁾ この論点こそフッサール哲学に対して、美学の可能性を開くものであるが、ゲーテの場合は、その論点に相応している。しかしゲーテの場合は、芸術的な問題にのみ限定することも、態度変更をしても、事象は中和化されないのである。つまり、ゲーテは自然と芸術を生命の概念によって捉え、その法則をもって人間をみているからである。逆に中和化されないこの問題は、インガルデーンの美学に対する考察を超えて、後期フッサールの哲学そのものを特徴づける一要素となっているのかとさえ考えられる。

後期ゲーテの象徴的態度とは、中和化されない態度の変更には外ならない。ハンブルガーの論ずる現象も、それが単なる現象とみえても、中和化されない現象学的態度変更によって、直観され、体験された事象に外ならない。その現象は、原現象にかかわることによって、象徴に通じ、沈黙的に判断中止をし、人生の態度変更すること諦観に外ならない。

象徴の問題をゲーテの側からだけ検討したが、フッサールは象徴そのものをどうみているのであろうか。⁽¹⁹⁾ この現象学者にとって象徴とは記号であり、数学の場合まで含まれてしまう。象徴は、内容のない空虚である。この概念は、内容を満たす直観と対にして用いられる。象徴そのものに対しては、ゲーテとは全く異なった立場に立っている。つまりフッサールが本質直観を位置させているところにゲーテの象徴の本質がある。原現象と本質直観には両者の類似性があったも、ゲーテは象徴の問題を原現象の立場において捉えているので、象徴そのものに対しては、両者が異なった立場をとる。ゲーテが詩人としての立場から、それが正当であるように、思想家にとつて、思考することが、形象（象徴）から離れることは当然である。

ところで、ゲーテとフッサールの現象学的な類似性として、意味するものと意味されるもの、ゲーテにとっては象徴するものと象徴されるものとの現象学的相違性は、現象学的な体験を通して、超越論的に考案可能であると述べたが、これは、岩石シンボルの沈黙性を経て、小箱の象徴性に妥当することをのべた。一方周知の通り、ゲーテには独自の象徴規定があるわけである。「詩人が普遍的なもののために特殊なものを探がすのと特殊なものうちに普遍的なものを直観するのでは大きな相違である。前者からはアレゴリーが生じる……しかし後者が詩文の本性である……」⁽²⁰⁾ いうまでもなく後者が象徴の規定である。そして一般にこの規定がゲーテの象徴性として知られているものである。この文はゲーテがシラーを意識して、その詩作態度からアレゴリーの概念を導びき、自らの詩作態度をこれに対応させて、自分の詩の本質を示そうとしたものである。ところでこのように定義された象徴性は、前述した「遍歴時代」の小箱の

場合と比べてみると、どのようなことが問題になるであろうか。まずそれには、引用文の規定に含まれているアレゴリーと象徴の本質を明らかにしなければならない。

まずアレゴリーの規定から検討しようと思う。この場合は普遍的なものに対して、特殊なものが探がし求められるのであるから、両者の間には必然性がない。従って、象徴と違って直観されていないので、体験されないまま、内的必然性をえることなく、偶然に実例が配列される。つまり仮象性をまぬがれることができないので、アレゴリーは空虚性を示している。またゲーテはアレゴリーをこうも規定している。「アレゴリーは現象を概念に変え、概念を形象に変える」⁽²⁾。象徴の場合は、理念を形象に変えたのであったが、それに反しアレゴリーは概念を形象にするのである。理念と概念の違いが、両者の相違であるが、概念は、空虚性をまぬがれることはできない。一方象徴は、特殊なものにおいて普遍的なものが直観＝体験されるのであるから、両者の間には内的必然性があり、仮象（空虚）性はみとめられない。そして、直接体験＝直観を通して、理念が形象に変えられるわけである。すなわちこの象徴の規定、これが一般にゲーテの象徴性として、動かし難い重みをもって、文芸論を支配してきたものであるが、その規定にはアレゴリーと対立している立場をとるので、仮象性＝偶然性は全然認められないのである。その場合は体験された内容が普遍性をもって必然的に仮象なく展開されるのである。つまり一般にゲーテの象徴として認められてきた定説においては、象徴するものと象徴されるものとの間に、なんら相違がなく、両者は全く同一なのである。両者の区別がないので偶然性が入りこめず、仮象（空虚）性が介在していない。象徴にとって不可欠とも

思われる記号＝標識としての仮象性は、考察対象の外に置かれてしまったのである。従って象徴はアレゴリーと対立概念として定立されたわけである。そのような象徴の実例としては、原植物や原動物、それに花崗岩シンボル等の、いわゆる自然存在の象徴性が、問われていたのである。

以上でゲーテがシラーとの間を意識しながら規定したというアレゴリーと象徴の概念はおおよそ明らかにしたと思う。仮象性の存在を最初から認めない、定説ともいえるべきこの象徴の概念を、前述した小箱の象徴性と比較すれば、どの点で両者が異なっているかはっきりする。つまりその象徴説では、最初から偶然性、仮象性、記号（空虚）性といったものを認めないので、象徴する外観（容器）と象徴される意味内容との現象学的相違性が、必然的に生じてくる仮象性を還元して、空虚性を根拠つけてゆくような小箱の象徴性とは明らかに異なっていることがわかる。アレゴリー的な要素も取り入れながら、象徴を自己構成してゆく小箱の場合とはちがい、原植物や花崗岩シンボルによって代表される、そのような象徴性は、象徴するものと象徴されるものとの間に相違性を認めないので、現象学的な観点において考察されることは不可能である。この点で、本質的に、小箱の場合とは異なっているのである。

いわゆるゲーテの定説ともいうべき象徴性においては、原植物や花崗岩シンボル等の自然存在は、人工的に制作された小箱とは異なっており、自ら内的根拠をもち、自律性をもって自由に存在している。しかしそのような象徴の態度からすれば、先に述べたモンタンの岩石シンボルにおける沈黙性の問題は、その傾向が小箱の場合ほど徹底しているとはいえないが、『遍歴時代』における象徴性が、自然

存在を問題にする場合でも、一般に定説とさえなってきた象徴規定とは、可成り異なった面を示しているのである。そこではモンターンが述べるところによると、文字（記号）と語の響き（音声）と、本来の意味との間には、超え難い断層があったわけである。それらの間は向上性というゲーテ独自の弁証法によっても克服できない問題があって、沈黙性という、一種の判断中止を行うような考察方法で、解決しようとしてきたわけである。

小箱が象徴性をもつのは、外観と内容の相違という仮象性を生み出す空虚性を還元するとき形成されるものであった。その場合小箱はアレゴリーに類似している。このアレゴリー性がなければ、小箱は同時に象徴性を完成することはできない。従って、現象学的な考察も不可能になる。小箱が現象学的に考察されるのは、両者の性質をもっているからなのであって、定説となっている、ゲーテの象徴論、つまり象徴するものと象徴されるものが同一であるならば、そのような考察は不可能なのである。小箱の象徴性においては、ゲーテ自らの象徴規定に反するかのごとく、アレゴリーが欠くことの出来ない要素になっている。象徴を構成する要素としては、このアレゴリーが象徴と同じ重要さになっているのである。これら両者の性質をもっている小箱の形成する形象は、自己構成的であったが、定説とされているゲーテの象徴性は、直観にのみ頼らざるうえない。なぜなら仮象性をみとめないからである。このような態度が、後年改められるとき、ゲーテは諦観を学び、その諦観によって、態度変更を行い、自己を放棄することによって、外界と大きくかわりあうのである。

ゲーテ本来の象徴性とされている問題と、傾向が明らかに違う小

箱の象徴性には、仮象性が大きな作用をなしている。エムリッヒの論点を引用して検討すれば、「他のものを指示する」ということによつて、小箱の象徴性が成立するのである。これは前に考察した、象徴するものと象徴されるものとの間に相違があって、本来別物であるのが、関連しあうのであるから、指示作用には仮象性「アレゴリーが伴うという現象学的な立場に外ならない。つまり何度も強調したように、仮象性が、欠くことの出来ない要素として、象徴の問題に組みこまれている。ではそのような仮象的アレゴリーの要素は、ゲーテには諦観の態度を強いるのであるが、一体どこから来たのであろうか。その要素は二つあると考えられる。一つはこれまで中心に考へてきた象徴＝認識の問題からであり、そこでは原現象を目で捉えようとする直観の放棄である。もう一つは、他の自我との関係、つまり社会的な問題からである。ゲーテにとって認識問題と社会問題は二面性をもちながら常に一つであった。だから、『遍歴時代』の中で、前述したモンターンが、文字と語の響きと、本来の意味との間にある超え難い障害（沈黙性）を述べた後で、ようやく岩壁や断崖から解読した文字を、他人に伝えることがいかに困難であるかを述べているのである。各自理解の仕方が異なっていて、自己の「読み取り方」を異にする警告しないではおれないのである。すなわち、他の人間（自我）との関係、この社会的な問題が、再度文字と意味との間を超え難くしている。このモンターンの例でもわかるように、ゲーテにとって、社会が、他の自我との出会いとして、他の自我は、異なった別の主観性として、客観的な存在一般のように、直接客体化できないから、仮象性を示し、アレゴリー的な、空虚な偶然性を回避することができなくなったのである。おそらくゲーテ

個人についていえば、他からみれば、最も模範的な市民的生活を送っていた時期に、このような他の自我との出会いという、客観化されない問題を現象学的に言えば相互主観性の問題として、社会的アレゴリーの面において、空虚な偶然性として学んだのではないだろうか。『遍歴時代』では山岳にいても積極的に社会とのかかわりあいをもちながら、反面折りに触れて語る、モンターンの現世の人間、社会の実相について述べるアイロニーは実に痛烈を極めている。そのようなものから、ここに一つ選んで、アイロニカルな仮象性、アレゴリー的な空虚性を確かめておきたい。「できれば人間というものを避けたいものです。救いようがありません。彼らは邪魔してわれわれをだめにします。彼らが幸福なら、彼らの馬鹿さ加減を放っておきましょう。彼らが不幸なら、その馬鹿さ加減には手をふれないで、救ってやりましょう」²⁴人間社会の中には馬鹿さ加減（不条理）が介在していて、それは他の自我との出会いにおいて生じる、客観化されない他の主体（主観）性を問題にしなければならぬ。他の自我との出会いが、仮象を生じて、他方ではこれが克服されるというのが、ゲート＝モンターンの思想であるから、現象学的相互主観性として、その仮象性は考えられなければならない。その偶然的空虚性は、外ならぬ小箱のアレゴリー性の仮象性とみななければならぬ。社会性の相互主観性は、小箱の外観という記号性と、中に置かれて然るべき意味内容との関係が内的必然性をもたず、仮象性を示すのと相応している。小箱は、認識象徴問題が、現象学的相違性によって考えられたと同様、社会問題においては、他の自我との出会いから生ずるアレゴリーの仮象性によって、同じく現象学的立場から、相互主観性として考察しなければならない。このことはまた逆に、

現象学的な相互主観性の問題には、他の自我との接点に仮象性を介して考えなければならないことを示している。ゲートにとって、小箱の例でもわかるように、社会的仮象性は根拠づけられ、空虚が還元されなければならないのである。このように根拠づけられるべき仮象的空虚性を、志向性と名づけると、その志向性は、自己放棄によって、空虚になったところで、意志とはちがった仕方に対象とかかわりあうことを確認しなければならない。つまりそこにこそ諦観の問題があるのであって、その観点によって、志向性は純化され、意志が自己放棄を行って、自らを空虚にし、冷静な態度で、他の自我と触れあい、客観的に外観とかわりあうのである。そのような仮象性の志向性は、現象学的に相互主観性として、小箱の、なにか他のものを指示するという機能と同じように考えてみることでできるのである。純粋な指示性としてのみ、自我をいったん停止して、小箱が容器という外観と、意味内容との相違性を超えることができるように、自己の自我と他の自我との相違性を、相互主観性の問題として、現象学的に還元し、根拠づけるためには、意志と考えられている自我が自己放棄を行って、諦観者の純粋な志向性の存在が確認されるのである。小箱の象徴性と同じように、そのような志向性において、ゲートにおける仮象性の問題は考えられなければならない。

仮象性が現われるなり、小箱の場合であれ、社会問題の場合であれ、空虚な仮象的偶然性は、内的必然性によって、根拠づけによって、還元されなければならないというのが、ゲートの問題である。では一体何によって、ゲートはぬきとることのできない社会のアレゴリーの仮象性を根拠づけようとしたのだろうか。『遍歴時代』にお

いては、モニターとマカリーエによって、根拠づけの用意がなされている。前者が山岳の秘密の解読からえたものは、行動の原理である。後者は、大地の思想を天体の圏内に解放する。『修業時代』で、彼は世才にたけた現実家であったが、その経過は描かれないが、『遍歴時代』で突然山岳の中に姿を現わす。岩石シンボルを学び山岳に入って、自然と一つになって、行動の理念を導びきだす。社会性をもつ行動が、仮象性を根拠づけるとき、諦観の問題を介して、教育州の理念になるのである。教育州は、そのように大地の中から育ってくる行動力によって、他の自我との出会いという仮象性を、自己放棄によって還元しながら、根拠づけられた世界として、建設されなければならない。教育州の理念は、そのような現象学的な観点において考察されるべきであり、相互主観性の問題として、小箱の象徴性と同じように把握されるべきである。従ってモニターは、社会のアレゴリーの仮象性を、岩石シンボルによって代表される山岳の自然によって、根拠づけるのである。他の自我との出会いという仮象性が、自己放棄によって、しかし自然の理法によって根拠づけられるならば、根拠づけられた仮象の社会性は、世界性とすべきである。根拠づけられた社会性を世界性とすれば、諦観こそは、この世界性において成立するものである。象徴性との関連でいえば、前述したゲーテの定説ともいうべき象徴性は、意味(Sinnbild)とされるのに対し、自己を放棄して、純粹な志向性として、他を指示する象徴性は意義(Be-deutung)とされるべきである。そのような象徴性を具体的に示しているのは小箱の場合に外ならない。外観(容器)と意味内容との相違を超える小箱の象徴は、Simbildとしての個体に固有な意味ではなく、個体を離れて、外側の立場に立って、世界

性を可能にする。それは相互主観性の世界である。外部の存在の総計が他の主観(自我)をも入れて、世界性を構成する。小箱は従って、諦観によって、世界性を示す点で、マカリーエと同じ問題を提起している。しかしマカリーエが天体に由来するのに比べて、小箱は、モニターのかかりあっている山岳の内部から由来するものであるが。

他の自我との出会いが仮象なのである。「色彩のゆたかな反映にわれわれは生命をもっている」というファウストの有名な言葉のなかで、反映に対して、エムリッヒが、他の自我と(自己)自我との出会いをみているのは正しいと思う²⁵。社会性の問題では従って、必然性を求めるだけの、いわゆるゲーテの象徴論とされてきた立場だけでは、仮象性を含む相互主観性としての『遍歴時代』の問題は、教育州の理念をも含めて、十分には考察できない。社会の仮象性が根拠づけられる世界性において、すなわち象徴するものと象徴されるものとの相違性を生む仮象的空虚性を還元し、偶然性を根拠づけるのは、小箱の象徴性に外ならなかったのである。

エムリッヒは小箱の象徴性が『遍歴時代』の全体を包括することを指摘している。一方トゥルンツはフェーリックスとヘルジーリエの恋愛問題に限定して考えている。後者の実証的な論証が、無類に正確なのだけでも、ゲーテが象徴するだけで、実際は表現しなかった部分を説明することはできないであろう。つまり小箱は外観という容器が、その意味内容と異なるように、実は外観のみ描いて、内的連関性は伏せておいたのであると考えられるだろう。——小箱は、これまで検討した問題性から、当然エムリッヒが主張するように『遍歴時代』の全般にかかわりあっていないなければならない。大地から出

た行動の思想は社会的仮象性にあうと、小箱の象徴性と同様に、他の自我との接点の空虚性を還元し根拠づけなければならぬのである。従って小箱の象徴性はフェーリックスとヘルジーリエの恋愛問題は、その表面に現われた一部であり、フェーリックスの他の問題、つまり彼が入学する教育州の問題まで含めて、全般的な問題となっているのである。小箱は、モンターンが、例の岩石シンボルの解説の困難さを説いた後で、情熱をさます象徴として有名な「岩焼きさま」⁽²⁸⁾の場面の次に、フェーリックスによって発見されるのである。そこは「巨人の城」と呼ばれる花崗岩と玄武岩のある洞窟のなかである。小箱が、その山岳に由来するとすれば、岩石シンボルの存在は、玄武岩は別に考えなければならぬけれども、一部考察したようにモンターンが思想のよりどころにしている永遠不変性を意味している。洞窟も独自の意味をもつであろう。そのような山岳に由来するとすれば、小箱の来歴は小箱の可能性を示し、『遍歴時代』のなかでそれが展開しているにちがいない。

二

小箱の展開の可能性は、その来歴のうちに含まれていると仮定する。外観（容器）と意味内容の異なる小箱の象徴性としては、その来歴はその外観と、小箱は人工的に制作されたので、全く別物であるけれどもこれを無視すれば、自らの仮象性のため、アレゴリーの偶然性を脱することができず、その空虚性を根拠づける契機が、失われてしまう。それで『遍歴時代』の象徴性について、「すべてのものは象徴的にのみ受けとらなければならない。その背後にいたるところな何か別な物が入っている」とゲーテ自ら語ったように、何か

あることをいっても、それは何か別のことを暗示しているのである。従って、小箱のことを述べてもそれが別なことを暗示しているわけである。そのような象徴の仕方を、小箱の象徴性において、象徴するものと象徴されるものとの相違性における問題として、その相違性が生むアレゴリー的な仮象性をいかにして、還元し、根拠づけられるかをこれまで検討してきたのであった。あることをいつも、それが他の別なことを暗示しているのであれば、記号と意味の相違性を問題にしながら象徴性を考えてゆかねばならない。象徴するものと象徴されるものとの間に、必然的に関連することを表現されなければ、ゲーテが追求した象徴的必然性をもって、象徴するものを象徴されるものによって根拠づけることはできない。事実『遍歴時代』のゲーテは、両者の間の必然性を、その両者の間の関係を表現することを極度に避けたのである。つまり、両者の間の関連性を表現しようとするとき、判断中止を行って、言葉で述べることを拒否したのである。そのような判断中止の態度がなければ、『遍歴時代』の象徴性は解明できない。なかでも小箱の象徴性は、この傾向が最も徹底した場合であった。つまりそこでは外観（容器）と中に置かれる意味内容との相違性は、前者のアレゴリー性が根拠づけられ還元されてはじめて象徴性を完成するのであるから、判断中止によって、沈黙のうちに、「事象そのもの」を展開しなければならぬのであった。従って「事象そのもの」は現象学の立場において、考察しなければならぬ性質のものであった。自然存在とは異なる人為的な小箱になおかつアレゴリー性を還元して、ゲーテ的な象徴性において、根拠づけなければならないとすれば、自己構成的に小箱は、体験された事象を通して、意識の中で、内的必然性を獲得しなければなら

ないのである。象徴するものと象徴されるものとの相違性をこえて、なおかつ象徴性を問うことは、判断中止を行って、対象とは自己構成的に超越論的にかかわりあいを行なわなければ、主観という空虚な容器は根拠づけられないのである。

しかし還元され、根拠づけられなければならないからといって、小箱の容器という仮象性は無視されてならない。アレゴリー的な性格をもつがゆえに、小箱は容器としては内容の空虚な偶成したものにすぎないが、主観性を表わしている、小箱の示す外観は、現象学的にいえば、「射影」を表わしている。この射影という現象がなければ、外観としては主観的な在方しかできない小箱の主観性は、客観的イデア的なものとかかわりあう術が外にないわけである。射影は「知覚」とは異なり、「感覚」を表わしている、外観にかかわる「見る」ことの主観的側面を表わしている。⁽³⁰⁾ 小箱の外観は、複雑な表情をしている。「感覚された資料」が射影の本質ならば、フェーリックスが「巨人の城」という洞窟から持ち出した小箱に最初の表現があったえられる時、いかつして様々な様相を確かめることができる。「その無鉄砲な少年はついにすばやく岩の裂け目から登ってきた。一つの小箱を持ってきた。それは小さな八つ折り判の本より大きくはないが、きらびやかな古い様子をしており、黄金で作られたように見え、エナメルが塗られているようだった」⁽³¹⁾ この簡潔な描写からいくつかの偶然的アレゴリーの要素が、見る人にとって、射影的主観性としてあたえられる。小箱を感覚するという主観性、すなわち射影に対して、客観的に知覚されるものは、八つ折り判の本との比較、きらびやかさと古い様子、そして黄金で作られているのかもしれないし、又はエナメルが塗られているのかもしれないということ。こ

れらの知覚によってあたえられた射影という主観性の側面は、何に一つ確実なものとして受けとれるものはない。たとえば「黄金色」というのは、ゲーテの色彩論では、金星の例にならって、恋愛を表わしたりする。この場合もそのモチーフは十分考慮される。なぜなら後述する予定であるが、小箱はフェーリックスと恋人ヘルジーリエに係っているからである。しかし小箱は黄金で作られていると断定しているのではない。そういう仮象性を示しているにすぎない。つまりアレゴリーの偶然的要素しか導くことはできない。すなわち「きらびやかさ」という現象は黄金を修飾する言葉といえようが、エナメルというのは黄金が仮象かもしれないということで、疑惑をひきおこす。古い様子からは、秘密めいた小箱にいつそう謎をもたせる。しかし何時制作されたかの説明は、具体的にはどこにもなされていない。次に本との比較であるが、実はこの小箱が書れなかった本ではないかという推論を、小箱のアレゴリーの偶然性が、正當なものとして提供してはくれないだろうかと思うのであるが、とにかく外観（容器）とそれによって象徴されるものが全く違うのであるから、象徴される内容が象徴するものから、何が飛び出してくるのか見方がつかないのである。

射影という小箱の主観性の側面に、知覚された資料をいくつか検討したのであるが、知覚という客観的な側面をいかに重視しても、そこからは小箱そのものという主観性しか小箱には残らないのである。従ってこの主観性を還元し、仮象的空虚性を根拠づけて、アレゴリーから象徴に通じるものは、象徴するものと象徴されるものの間に、判断中止を行って、アレゴリーの偶然性をいったん停止するならば、小箱の内的必然性が獲得されるのではないだろうか。そ

こで小箱の容器という空虚性をいったん停止して、小箱の可能性を別物として考察してみると、小箱の展開の可能性は、その来歴にあるのではないかと思われる。小箱の展開は発見者のフェーリックスに係ることであり、その来歴は「巨人の城」がいかなる可能性をもつのかということである。

象徴するものと象徴されるものとの相連性が小箱の象徴性において現象学的に判断中止の作用をもたらすのである。小箱の象徴性においては判断中止されるために、小箱の展開の可能性はフェーリックスにかかわりながら、その来歴のうちに含まれていて、それがモントーンにかかわっているというようなテーマは、実証することが困難であるなどというのではない。実証そのものが不可能なのである。実証することが不可能であるから判断中止を行うのであって、たとえゲートがどこかで、もし小箱の展開の可能性は、その来歴のうちに含まれていると説明しているとすれば、それは象徴するものと象徴されるものとの相連性が小箱の象徴性の特殊性なのであるが、その観点を自ら破わしてしまうのである。言葉では決して、小箱の外観とその意味内容を結んで表現してはならないのである。判断中止を行うことは、そういう言葉を沈黙の中に隠してしまわなければならない。沈黙の伴う象徴性においては「事象そのもの」が展開しなければならなかったのである。

従って、小箱の象徴性がその来歴のうちに含まれているという仮定は一種の冒険かもしれない。実際シュタイガーは、小箱の問題を大きくするのは危険性があることを警告している。勿論その指摘はエムリッヒの小箱の象徴論についてであるが、しかし小箱はそのような危険性を超えなければ、論考する立場がえられないのである。

象徴するものと象徴されるものとの相連性をもつという小箱の運命が、実証の在方を否定するのであれば、記号としての外観という容器に判断中止を行って還元し、仮象性を根拠づけるより外に方法がないのではあるまいか。もしそうでなければそれは、蓋を開けないまた放置するより以外にないだろう。シュタイガーだけでなく、トゥルンツも放置しておきたいものと思われる。

小箱の展開の可能性は、その来歴のうちに含まれているという仮定を、小箱の仮象性に判断中止を行って、根拠づけられうるものとすれば、小箱を発見するフェーリックスがその展開に即して、物語が形成されるはずである。物語が展開するといっても、筋の上では空白ばかりであろう。なぜなら十全に展したら、判断中止という沈黙の象徴性が破わされてしまうからである。フェーリックスは「巨人の城」と呼ばれる奥深い山岳の洞窟から小箱を持ってきたのである。その洞窟に小箱はその来歴を負っているはずである。しかしゲートは「巨人の城」と小箱の関係を何も記していない。ただ小箱がそこに置れているという事象のみが表現されているにすぎない。象徴するものと象徴されるものとの相連という小箱の象徴性からすれば、それは当然であるし、そうなければならない。もし、言葉で両者の関連を説明すれば、小箱の特質は失ってしまう。またトゥルンツは、宝探しに興味を抱いているような少年フィッツというフェーリックスの友人が、外のどこからか探してきて、この洞窟に置いたのかもしれないと推測している。その説も否定できない。なぜなら、小箱について確実なものは、それが小箱であるという主観性としての射影しか与えられないからである。フィッツ少年も不確かな存在であり、素生もわからない。この少年は小箱の鍵と関連しているのだ

るが、不思議な子供である。とにかく小箱については何もわからな
い。トゥルントの説が正しければ、小箱が「巨人の城」にあったの
ではなくて、そこに置かれていたのは偶然にすぎなくなってくる。
これでは、小箱の展開は、その来歴にあって、その可能性は「巨人
の城」の問題性に所属しているはずであるとは、なおさらいえなく
なる。しかし外観と内容の相違を象徴論の出発点にした小箱にとっ
てみれば、その方が好都合なのである。

フェーリックスは、記号（文字）と意味の間の仮象性が判断中止
されて、小箱が「巨人の城」と関連するというような文字は沈黙し
てしまい、「事象そのもの」となった小箱を洞窟の中から持つてくる
のである。つまりここで否定されるのは、小箱と「巨人の城」につ
いて、その関連性を述べる言葉なのであり、それ以外の言葉ではな
い。すなわち言葉は小箱の立場では、小箱に關連することならばい
くらかでも可能なのである。また反対に「巨人の城」にのみ内在する可
能性についての説明なら同様にいくらかでも可能なのである。しかし
小箱に關する言葉の集合（射影としての主観性、これは前に確かめ
た事柄）と「巨人の城」についての言葉の集合（客観的イデア的存
在、これについては後述するであろう）との間を關連づける言葉
のみ欠けているのである。小箱の象徴性においては、両者を結ぶ言
葉のみ存在してはならないのである。くだいようであるが再度強調
すると、どの範囲に限定された言葉が可能であり、またどの領域に
所属している言葉が不可能なのかを確かめておかねばならない。つ
まり言葉が沈黙するのは、他に關連づける言葉なのであり、ある事
柄——事実に所属する言葉は決して沈黙したり、判断中止されたりす
るわけではない。象徴するもの（記号）と象徴されるもの（意味内

容）との關係をのべる言葉のみが、沈黙しなければならず、判断中
止されなければならないのである。従って、小箱そのものについて
述べられた、主観性としての言葉の存在を疑う必要はないのである。
その言葉はそのまま存在しうるのである。

小箱の象徴性に必要な「事象そのもの」を問題にして、いわば二
種類の言葉があることを確かめることができた。一つは、小箱そのも
のについての言葉と、「巨人の城」そのものについての言葉であり、
他の言葉は、小箱そのものと「巨人の城」とを結ぶ言葉である。「事
象そのもの」というのは後者の言葉でなければならぬ。ところが
それは、沈黙していて、判断中止を受けて表現されない言葉に外な
らなかつたのである。そして、小箱の象徴で表現しなかつたのは、
実は後者の言葉であるが、それは還元されて、判断中止された結果、
表現されることができず、結果として表現されたのは前者の、小箱
そのものについての表現であり、「巨人の城」についての描写に外な
らなかつたのである。従って、小箱と「巨人の城」の關係は全く見
当がつかず、小箱の可能性についても、それを解く鍵が単純な文字
としては失われてしまったのである。もっとも小箱には鍵が存在し
ていて、これは前述のフィッツ少年が握っているのであるが、これ
については後述する予定である。

いわば言葉に二種類存在することを考察したわけである。一種の
みで表現されて、他の種の言葉はついに表現されず、失れてしまっ
た。表現されるべくして、表現されなかつたそのような言葉とは一
体どのようなものなのだろうか。先に小箱の展開の可能性は、その
来歴のうちに含まれていると仮定して、何の判断材料もなく、そう
考えたのであつたが、もしそうだとすれば、モンターンが、この小

箱について何らかの見解を述べなければならぬであろう。もしそうでなければ、山岳に住み、岩石シンボルに精通している存在が無に帰してしまうからである。ではここで、モンターンの研究している対象（岩石）が「巨人の城」とどのように関連しているかを先に述べて、小箱とその来歴になった「巨人の城」との関連を考察したいと思う。

ゲートは「創作ノート」に、「巨人の城」について次のように書いてある。「巨人の城 花崗岩の上の玄武岩（古代の穴居人（の）生活」³⁴）断続的に並べられたこれらの項目は、それぞれ象徴的に、小箱と関連しあっているはずである。モンターンの側からいえば、これらの項目のなかで、花崗岩が最も密接に彼と結びついているであろう。また玄武岩も独自の意味をもっている。しかしそれらは後述することにして、問題は、モンターンの特に花崗岩シンボルを通して、この「巨人の城」と密接にかかわっていることを証言しておきたかったのである。彼の外に何人も山岳に入って自然の秘密を解説しようと思っている人物は勿論存在しない。必然的に「巨人の城」とモンターンの関連しあうはずなのに、完成した『遍歴時代』においては、彼が一度も小箱について意見を述べることはない。だが小箱の象徴性からすれば、当然モンターンの小箱とかかわりあうはずであるが、一度も彼が意見や見解を述べない方が、象徴機能をよりよく果すのである。なぜなら、前述したように、ゲートが小箱と「巨人の城」が関連することを述べていないと同様に、もし彼が小説の中で、講釈したのでは、象徴するものと象徴されるものとの相違性における「事象そのもの」の還元性が失われ、根拠づけられなくなってしまうからである。両者の間には、前述したように両者の関連を説明す

る言葉を拒否して、完全な沈黙が領していなければならないのである。アープリオリに、両者に関連する言葉があってはならないのである。

ところが、この問題に重要なことが見いだせるのである。小箱の象徴性がまだ十分練られていないで、象徴するものと、象徴されるものとの相違性がまだ十分洞察されなかった時期に書かれたとしか思われない、補遺の部分をみると、モンターンの小箱に関する意見を述べていたのである。それは重要であるから、ここに拾ってみると、次の通りである。「モンターンの小箱（小箱）が見せられた。彼も、それに暴力を加えて開くようなことをせず、保管しておくべきであるという意見であった。というのは、それは非常に複雑な鍵によってのみ開かれるからである」³⁵勿論、小箱について、彼が「巨人の城」における花崗岩の秘密を解説しているからといって、決定的な発言はしていない。しかし重要なことは、小箱について意見を述べているということである。このような補遺において、モンターンの小箱と、何らかの点で触れ合っていたのである。この何らかの点で触れ合っていたのだと知ることができれば、実際は表現されてはならない言葉でありながら、表現されないままに、このことが確められるのである。だから、沈黙とは、一度書いたこのような部分を削除して還元し、判断中止を行って、この部分は、いわば書れざる本として、永久に隠されたままではないなければならないものである。それが小箱の象徴性の問題として考えるかぎりにおいては。勿論、そのように描かれてはならない。もしそのように描かれたのでは、象徴するものと象徴されるものとの相違性を基調にした象徴性は崩れてしまう。おそらくゲートは、そのような説明をしたので

は、小箱の象徴性を徹底させることができないことを知って、この部分を削除したのではないだろうか。ところがもう一つ問題点が現われてくる。それはどういうことかといえ、完成した作品の中で、モンターンが補遺の中で述べていたのが後に削除されたのと同質の見解を、固有名詞の呼び名を持たない老人、この種の老人は、『遍歴時代』にしばしば突然に登場するのであるが、彼は、小箱について次のように述べているのである。「それ（小箱）を大して傷つけることもなく開くことができるでしょう。不思議な偶然によって入手できたのなら、あなたの幸福をそれで試してみるべきでしょう。もしあなたが幸福に生れついていて、この小箱が何かを意味するならば、折にふれて、鍵も見つかるといって、あなたといわれているのはウィルヘルムである。勿論老人は小箱は開くべきでないという意見である。この見解とモンターンの言葉を比較してみれば、老人の見解の方がはるかに自信に満ちていて、積極的に述べている。しかし両者に共通の点は、無理に開くべきではないということである。そういう側面を考慮すれば、補遺のようにモンターンが小箱についてこの種の発言をすると、完成した作品では、老人が、もう一度くりかえして説明する必然的な理由がなくなるわけである。しかし問題はそんなに単純なことではない。本文では前述したようにモンターンの発言は削除され、「巨人の城」の前にさへも彼は姿を現わさないのである。そのようにモンターンが、小箱に全然関連せず、その部分を、名もない老人が突然現われて、予言のように意見を述べるのと、モンターン自身が、補遺のように意見を述べるのでは、どのような相違点があるのだろうか。

補遺ではモンターンが説明している問題を本文では同じように老人

人が説明するとすれば、老人の素生と身分をゲーテは明らかにしていないので、彼の発言は小説の中で内的必然性がえられず、彼の言葉は断片になってしまふ。ゲーテの象徴性における内的必然性からいえば当然そう断定しなくてはならない。老人の説明は全く偶然であって、彼はモンターンが山岳を通して、小箱にかかりあうような根拠をどこにももっていない。もしそれがモンターンが述べるのであれば、必然性をもって根拠づけることができる。だが前に言葉における二種類の問題において、小箱については、象徴するものと象徴されるものとは、全く異なっており、その相違性のために、小箱と他の存在との関連は、言葉にすることができなかったのであり、ただ表現できる言葉は、小箱なら小箱のみ、岩石なら岩石のことしか発言できなかったのである。従って、小箱について、モンターンが、直接発言すれば、補遺のように簡単に解決できたはずであるが、そのような安易な必然性は拒否されなければならなかったのである。もしモンターンが、それを述べるのであれば、岩石シンボルと同じようになってしまい、小箱の象徴の仕方とは全く異なってしまう、判断中止され、還元されなければならない「事象そのものの展開という象徴性は崩れてしまふ。

小箱の象徴性のように記号（文字）と意味内容との相違性を前提にした地平においては、補遺のように、モンターンが小箱と関連してはならないのである。本文のように、名もない老人が、突然姿を現わして、といってもこの老人は美術蒐集家、骨董商人であるから、アレゴリー的には意味は通用するわけであるが、とにかくそのような老人が、小箱について意見を述べなければならない。老人が小箱について述べるのはアレゴリー的である。本来ならばモン

ターンが内的必然性をもって述べるべきであるけれども、そのような内的必然性が直接表現されないので、いわばモンターンの位置にかの老人が影のように現われたのであり、彼はモンターンの仮象とさえもいわなければならないだろう。本来なら一人の人間であるはずの存在が、必然的な関連なくして、このように偶然に、別な人が姿を現わす。他に関連づける言葉はないけれども、アレゴリー的な態度をとる人物も、必ず全体的にみれば意味づけられるはずなのである。

本文では削除された部分を補遺の中から拾って、それは本来、小箱の象徴性からすれば、表現されてはならない文字であることを述べた。ゲーテの象徴性において、沈黙しているというのは、そういう言葉があつてはならないということであり、判断中止において、還元されなければならないものは、そのような言葉である。では外にそれに類するような例はないのだろうか。補遺においては、「巨人の城」についても、ヴィルヘルムはモンターンの、それが、人工的に作ったのか、それとも、自然のままなのか、を聞かしている。補遺における文章は次の通りである。「子供たちは、ここは人間の手による作り物であると確信していた。ヴィルヘルムはそれが自然による仕事であると多分見ていた。しかしモンターンの彼の意見を聞かせてほしいと思つた」⁽³⁷⁾いうまでもなくこの部分は、本文で削除されている。これも補遺では内的連関性を求めて、小箱に対するモンターンの関係と同じく、「巨人の城」についても同じような配慮をしていたのである。これら両者が削除されたことは決して偶然ではない。内的必然性を言葉で述べてはならないからである。

先に内的必然性を求めて、小箱の仮象性を根拠づけるために、モ

ンターンと「巨人の城」、モンターンと小箱について、それぞれ関連を実証することは不可能である、と述べたのであるが、本文を離れて、補遺に当たってみると、その後検討して、明らかになったように、モンターンはそれぞれ、何らかの形で、関連していたのであった。しかし、それらは、なぜ本文から削除され、補遺の中に埋れたかといえ、小箱の象徴性と問題は同じく、表現する言葉と表現された内容が、相違していて、文字は記号にすぎず、そのような関連性を説明することはできないからである。

言葉で表現されてはならないが、そのような関係は絶対に必要なのである。その必要性は、補遺が本文に隠して、書かれてはならない、いわば第二の本を形成しているのではないだろうか。いわば、そのような表現されなかった本、文字で書れることが不可能な本が、どこかに存在しなければならないはずだ。その隠れた本によって、初稿においては描写されていた「巨人の城」の場面が、決定稿では削除されて、小箱の象徴性が、象徴するものと象徴されるものとの相違性にもとづく、現象学的な考察が可能となったのである。象徴するものと象徴されるものとの関連を示す言葉が、判断中止されて、文字が削除され、初稿から除外されて、括弧づけされながら、存続しつづける現象学的剰余によって、相違性を前提にした両者の間に、確実な根拠づけが行われるのである。その現象学的剰余こそ、本文から抹殺されても、括弧にくくられず、本文から意味が除外されずに、象徴するものと象徴されるものとの相違性を超越的に根拠づけるのである。文字で表現されてはならないその本こそ、現象学的剰余に外ならない。その際、小箱とモンターンの関連性を示す言葉が、もし初稿のように表現されれば、ゲーテが詩作から除外した単なる

因果関係のような、ものに転落してしまわさうえないのである。それが判断中止されて、表現されずに、本文から姿を消して、補遺に留まるならば、除外されても、後に「事象そのもの」が残って、現象学的剰余として、根拠づける役目を果すのである。

以上で大体、モンターンと小箱の間、モンターンと「巨人の城」の間にある、表現される文字がない関係が明らかになったと思う。

しかしやはり一度は、これらの間の内的関連を示す言葉を聞かなければならないであろう。もしそうでなければ、小箱は、単なるアレゴリー的存在になってしまふであろうから。内的関連性をもたない、そういうアレゴリーなら、そんなに困難ではないであろう。小箱は単なる偶然性のうちにあるのなら、各人の読み方があってよいはずであり、例え文字が射影として、主観性にもとづく記号に終るなら、判断中止を行なわねばならない、現象学的な問題に逢着する必要はなかったのである。この現象学的還元性が避けられないがゆえに、小箱という、外観の偶然性が、各人によって、読み方を変えてはならないのであり、誰が解読しても、原則的には必ず一つの解答しかありえないのである。それがゲーテにおける象徴的必然性であり、それは文字が括弧づけられてもなお除外されない現象学的剰余に外ならない。だから、決して、本文から削除されたからといって、補遺に留まる、モンターンと小箱の関連性、彼と「巨人の城」とのそれは、消滅してしまうことはないのである。ただそれを表現する文字がないだけのことである。それは、沈黙において、捉えなければならぬ「事象そのもの」に外ならない。「事象そのもの」とはそういう関連性を示すものであるが、それは、現象学的剰余として、客観的イデア的存在でなければならない。従って、小箱がそういう「事

象そのもの」を明らかにすることは、小箱において、体験された事象が、存在とのかかわりあい、意識によって捉えられているのである。さしあたりその事象を体験しているのは、いうまでもなくモンターンに外ならない。そして、この体験された事象を他に伝えることが、『遍歴時代』では教育州の問題として、考察されなければならないだろう。

小箱の象徴性の問題において、象徴するものと象徴されるものと相違性に不可避の問題を考えながら、両者の関連性を直接表現する文字を還元しなければならないとしているうちに、例え還元してもそれは現象学的剰余として、括弧づけられないものがあるのではないのかという疑問が起ってきた。それは勿論補遺に残っている文字そのものではない。むしろ還元されなければならないのは、そのような文字である。だから、本文には削除されていても、補遺における文字が還元されて、後に残った現象学的剰余というものが、象徴的必然性の根拠づけとして残っていなければならない。いやもしそれが可能性として存在していなければ、小箱は単なるアレゴリーになってしまふ。それでこのように結論できるように思う。文字の上からみれば、完成した作品と、一度書かれては、判断中止され、還元されて削除されてしまった本との二冊が一緒になっていなければならないのではないだろうか。勿論削除された本は、還元されて、現象学的剰余として残っているわけである。その本来書れるべき本が、還元されて、小箱は決して、アレゴリーの偶然ではなく、その内容によって、容器という空虚性が完全に充たされているのである。その現象学的剰余によって、これは先に現象学的統一性として考察した形象といってもよいのであるが、小箱は象徴するものと

象徴されるものとの相違性を超えることができるのである。

では一体そのような本はどこにあるのだろうか。前述したように、補遺に残っている文字はあくまでも還元されなければならないのであるから、そこに姿はないわけである。それで、もう一度、いわば二冊の現存する本、といっても本文と補遺のことであるが、両者の間にある相違点に着目してみたいと思う。すなわち、当の小箱についての、両者の表現に何か相違はないかという点に注目してみたいのである。まず最初、本文における小箱の説明で次のような箇所を目を向けてみたい。「大きな鉄製の箱の蓋を開くために、彼(フェーリックス)はこん棒を(ヴィルヘルムに)求めた。それを支えにして、蓋の下に入れたり、くさびにして蓋の間に押しつけた。とうとう彼は大きな箱は空であるのがわかったが、その片隅に豪華な本をみつけた(と、フェーリックスは語った)」。豪華な本と書いてあるのは勿論小箱のことである。この箇所については、トゥルンツもエムリッヒも、小箱が豪華な本とも呼ばれるとぐらいいしか述べていない。しかしそれは単なる外形の偶然性によって、単に似ているからという理由にすぎないのだろうか。また、先に引用した処で、フェーリックスが小箱を「巨人の城」から持ちだしたときに、こちらは文法的にも比喩として、それは八つ折り判の本より大きくはないという項目を、小箱の射影として確認していたわけである。しかしこれは、比喩の域を出ないであろう。では先ほどの豪華な本という部分はどのようなのだろうか。そこでもう一度補遺に帰って、異同がないかを確かめてみたいと思う。この部分に相当する補遺をみると、そこには「豪華な本」とは書いていない。「豪華な小箱」⁽⁴⁰⁾と記るされていたのである。この「豪華な小箱」というのは、本文では、小箱の射影現象と

して先に検討した引用文にのっていた。こうみえてくるとこの場合は、補遺にはなくて、本文にあるということになる。それはどのように考えるべきであろうか。トゥルンツやエムリッヒのようにやはり単なる比喩として、背後に根拠づけられる必然性はないのであろうか。この場合も勿論、小箱における象徴性は、象徴する容器という外観と象徴される意味内容との相違という、判断中止なしでは考察不可能であるから、豪華本という外観をもって結論づけることはできないであろう。

ここでもう一度、ゲーテの象徴性における沈黙の問題として、エムリッヒが、山岳シンボルに取りくむモンターンの論点に注目したところを検討したいと思う。そこでは文字や語の響きは、本来の意味を知らせるには十分でないと、モンターンは主張している。できればそのような文字などはなしで済すことができれば、それにこしたことはないのである。つまり沈黙を通して、現象学的にいえば、記号という文字そのものが、仮象であり、空虚は根拠づけられなければならないので、沈黙は判断中止であり、還元されるのは文字そのものなのであった。彼はそのような難問に取りくもうとするのである。その心境をヴィルヘルムにこう話して聞かせる。「もし私が……正しくこれらの岩の裂け目や切れ目を文字として扱い、それらの解読を試みて、それらを言葉に形成し、言葉を読みこなすよう努めるなら、あなたはそれに異存ないでしょう」⁽⁴¹⁾ヴィルヘルムは、それはアルファベットでしようとするのであるが、モンターンは文字と言葉を使いわけているから、それに従えば、ヴィルヘルムのいっているのは彼の使う文字に当り、それは決して言葉に形成されたものではないし、解読されたものではない。文字は単なる記号にすぎない

い。従って、この場合の言葉は解説されて、文字の記号性が還元され、仮象性が根拠づけられたものに外ならない。そのようなものを客観的実在として、「自然は一冊の書物に外ならない」といっている。自然が書物であるということは、この場合、象徴の沈黙性において、文字の記号性が還元されたものに外ならない。文字は還元されても、記号の背後に確かなロゴスとして存在し続けなければならないのである。しかし文字は判断中止され、括弧の中にくくられるので、表現されないのである。こうみてくると自然は書れざる本ではないのかと思われてくる。

ゲーテにおける言葉の問題をもう少し続けたいと思う。造形芸術に関するエッセーに「自然の単純模倣、マニール、様式」というのがある。マニールの項目では、こう述べられている。「論者の精神が直接表現され特徴づけられる言葉が、それ（マニール）になる」この言葉という概念が造形芸術と関連して用いられているから、この場合意味をもつのである。つまりマニールという手法に関する主観的な表現法では、造形芸術も、言葉で論ずることができるということである。それは「概念」に属する言葉である。象徴論との関連でいえば、それは形象と結びつく言葉ではないのである。だから詩作における言葉とはちがひ、造形芸術の最高段階と規定された様式では、その概念を表わす主観的な言葉は姿を消してしまうのである。様式においては、マニールの言葉は還元されて、「事象そのもの」が、認識の本質として、直観されるのである。このことから言葉は主観的には概念を述べる際に、いろいろなものに使用できるのである。しかしそれは次の段階で還元されて、他のものに席をゆずらなければならないのである。だから詩の場合も、形象と結びつくといわれ

るとき、その言葉は、判断中止されて本来なら消滅しているはずなのである。しかし詩のみは、消滅したはずの文字が、造形芸術の場合とは異って、依然として姿を消さないかのように見えるのである。しかし実際はそういう文字は消滅してしまつて、詩作の場合も造形芸術の様式と同じように、「事象そのもの」が後に残っているのである。

造形芸術において、様式においては、芸術論が姿を消して、形姿が現われるように、詩作において、文字が消滅して、形象が現われるように、自然も、その本質においては、文字を還元し、造形芸術や詩作と同様の「事象そのもの」として、モンターンに把握されているのである。そして、小箱は、モンターンの体験する自然と、文字で表現されてはならないにもかかわらず、判断中止され、還元されてもなおかつ、後に残ったものが、現象学的剰余として、必然的にかかりあつていなければならなかったのである。もしそうだとすると、この小箱は、還元された文字であり、それでいてなおかつ、空虚であるはずの内部に、括弧にくくられてもなおかつ、後に残ったものが保管されているのではないだろうか。補遺の中に書かれている文字が還元されて、消滅するはずの、文字では直接表現されない本なのではないだろうか。しかし見る人には、それは小箱にしかみえない仮象でも、それは、還元されて消滅するはずの文字という外観しか示さなくとも、内容は、「事象そのもの」を、現象学的剰余として保管しているのではないだろうか。「豪華な本」とか「八つ折り判の本」というのは、小箱の仮象として、内容の空虚なものかもしれないが、これまで考察したところから、象徴するものと象徴されるものとの相違性を超えて、小箱の外観は括弧にくくられる文字

という仮象的記号であっても、還元されたものは、判断中止されても後に残る現象学的剰余としての、「事象そのもの」であり、それが小箱の中に、文字で書れてはならない本として、保管されているように思われるのである。

小箱として書れざる本は、もう一度確かめておくと、『遍歴時代』の本文に載せられてはならない部分である。本文として完成したのは、小箱についての表現であり、「巨人の城」についての表現であり、モニターについての表現だけであった。書れた部分がそのように限定されるので、『遍歴時代』は大変奇妙な感じのする作品になったのである。しかし、それは小箱における象徴性が解説しているように、象徴するものと象徴されるものとの相違という厳しい状況のもとで、なおかつ象徴性を求めるから、表現されてはならない断片と断片の間を根拠づけるものが、必要だったのである。小箱が本であるというのは、断片と断片の間を述べる「事象そのもの」を本にしてい、内側に保管しているのではないかというのである。そのように断片と断片の間を可能にするものを、言葉なく、小箱が所有しているから、断片は他の断片に相対的に関連し全体にかかりあうことができるのである。ゲートはそのような在方をする『遍歴時代』について、次のような説明をしている。「それ（『遍歴時代』）がプロットの通った一つの作品からできていないとすれば、それは一つの意味からできているのである」この引用文の援用を受ければ、小箱は意味(Sinn)だということになる。しかし Sinn が個体に固有の意味を表わすとすれば、むしろ外界を指示して、世界性を根拠づける象徴性をもつ小箱の意味は Be-deutung でなければならないのではないだろうか。

三

小箱の展開の可能性は、それがフェーリックスに係るのであるが、そのまま小箱の来歴に含まれているということは、小箱の象徴性にとって、根拠づけられなければならない事象であった。しかし象徴するものと象徴されるものとの相違性は、直接に、具体的にいえばモニターによって、小箱という仮象が、自然存在によって、根拠づけられることができなかったのである。そのような仮象と意味内容とを結ぶ言葉は表現されなかったのである。このことをわかりやすくいえば、小箱という主観性の主語 S は、述語となるべき P によって、繫辞で、直接結ぶことはできないのである。つまり S は P であるというロゴスの基本判断が停止してしまうのである。主語述語の関係が削除されてしまうと、S は S として、切断されてしまうわけである。それでもゲートの場合は切除された内的連関性はどこかに必ず保管されていなければならないのである。なぜなら、判断機能を失った無数の主観性の S のみが、雑然と集合していたのでは、それは単なる偶然性のアレゴリーでしかないからである。雑然と S のみが無限に断片として並んでいるにすぎないようにみえて、実はどこかで、根拠づけられ、S は P であるという判断を中止して、還元されたものがどこかにあったのである。そのような象徴機能がどこにあるかといえば、これまでの考察から、それは小箱の事象であり、表現するに言葉はなく、小箱の外観という偶然性は、還元されるはずの文字とみてよく、それが容器として、中に、還元された事象そのものを置いていると考えたのであった。もしそのようなことが可能であれば、小箱の象徴機能として、小箱の展開の可能性は、その来歴のうちに含まれていると推論できるわけである。そしてま

た逆に、そのような小箱による還元作用が有効ならば、小箱に係っている来歴とその展開の可能性は、すべて、小箱の中で、書れざる本の中で、内的必然性が与えられているわけである。だから何かあることをいっても、それが他のものを象徴していて、外観は偶然的アレゴリー風にみえても、内的連関性をもっているはずなのである。

従って、『遍歴時代』に表現された、無数の断片としか思えない部分も、小箱が象徴するような方法で根拠づけられるのであれば、単なる漂流物ではないわけである。その漂流物は、文字を通しては理解できないが、漂う方向に必然性がともなっていて、海原を流れているのである。潮の流れは体験流として、意識そのものであるとしか考えられず、判断中止されて述語（P）を失った主観性のSが、漂っているのではなく、小箱を通して流れている意識の中に、「事象そのもの」として、無数の島のように浮んでいるのである。小箱の内容は体験されたものであり、内部の空虚性は志向性を得て、外界を指示し、容器の仮象性を還元する能力があたえられているのである。

従って、小箱の展開の可能性は、その来歴のうちにあるというテーマの下に、これからいくつかの問題を考えてみたいと思うのであるが、それらはすべて、断片のようにみえるけれども、「事象そのもの」として、根拠づけられ、還元されたものと考えてよいのではないかと思う。

小箱の展開の可能性は、その来歴に負うとすれば、前述したように、「巨人の城」について、ゲートが創作ノートに書いていたので十分、その来歴については確認できるのだと思う。もう一度引用すれば「巨人の城 花崗岩の上の玄武岩（古代の）穴居人（の）生活」という簡潔なものであった。これらの項目のなかで、花崗岩につい

て、最も強く関心を寄せていたのだろう。『遍歴時代』の中で、モンターンをして次のようにいわせている。「そのようなことを質問するのなら、お前（フエリックス）が現在ここで最も古い山岳の上に、世界最初の岩石の上に坐っているのだということを考えてみたまえ」⁴⁶モンターンの最も古い山岳とか世界最初の岩石というのは花崗岩を指している。ここでその岩石の意味を検討する前にもう少し問題を拡げておきたい。「お前がそのようなものを質問するなら」という部分のそのようなものとは、金雲母を指している。更にフエリックスは、「世界は一度にできたの」と質問する。このところには「巨人の城」の玄武岩と関連しており、これは火山＝火成説という、モチーフを秘めている。これらの問題は順次展開することにして、まず花崗岩の例から始めようと思う。ゲートには「花崗花について」というエッセーがある。それを読むと、モンターンが、語る内容と殆んど同じ文章がみられる。「名も知らぬ（花崗岩）の山をゆくと、古代人の経験が確かめられた。この世の最も高く、最も深いのは花崗岩であり、この種の石こそ……われわれの地球の基礎であるという古代人の経験が」⁴⁷またこの岩石は、エチオピア、エジプトと結ばれて、エジプト人が太陽神を作り、スフィンクスをこの石で作ったと、この岩石が古代の歴史の中でどのような運命を辿ったのかを述べている。岩石は単なる鉱物ではなく、そのような歴史と自然の関係において考察しているのである。花崗岩は世界の根源を象徴しているのである。この性質が小箱にも受けつがれていると考えないわけにはゆかない。特に古代の穴居人としてのエチオピア人たちが、彼らには洞窟の外、花崗岩にも関連しているわけである。このように無数の糸がよりあわさって、簡単に記入された「巨人の城」の問題性

を識りなしているように思われる。

しかしここに不思議な物語が、花崗岩、エジプトに関連すると思われる話として描かれているのである。それは『遍歴時代』の冒頭に置かれているのである。それは「エジプトへの逃亡」という聖書の故事にちなんだ題目がついている。山岳地帯に入ったヴィルヘルム親子が最初に出会ったのは、聖ヨゼフ二世とその一家の人々なのである。この聖家族は、ヨゼフ二世という名前からわかるように、聖書の物語そのものではない。モンターンが山岳から、一冊の文字にならざる本を解説しようとするように、ヴィルヘルムは、聖書にちなんで書いた「エジプトへの逃亡」の絵をみて、この物語が、聖書に類似していることを述べるのである。巨大な山岳の中で、修道院や礼拝堂は、廃虚に近いのである。だがこの物語は、聖書と類似の世界を作っているにすぎない。ここでヴィルヘルムが学ぶのは、人間愛である。モンターンはそういう優しさをもたない。モンターンのリゴリズムは、ヴィルヘルムの人間愛によって柔らげられなければならないだろう。聖ヨゼフ二世には一つの素朴な社会があるが、モンターンにそういう人間性はないのである。あるいは小箱には危険性が伴うのであるが、そのようなモンターンの厳しさもこめられているのだろうか。

ヴィルヘルムはヨゼフ二世と会って、高山の上から遠方を見渡す⁽⁵⁰⁾。そして遠方の彼方にはマカリーエの城もあるはずである。例によって突然現われる「エジプトへの逃亡」は、何の説明もないのであるが、ここでヴィルヘルムが人間愛を学ぶことと、もう一つ「エジプトへの逃亡」が、ゲーテの花崗岩に対する関心と一つになっているように思われる。もっとも、ヨゼフ二世の屋敷では花崗岩については何

ら読みとることはできないのであるが。世界の根源、エジプトの岩石、花崗岩の永遠性は、聖書における「エジプトへの逃亡」の歴史を保管していて、現在にまで、その存在が及んでいるのである。岩石は歴史と一つになっているのである。

山岳地帯に入って、少年のフェーリックスは、すぐに金雲母に目をうばわれる⁽⁵¹⁾。少年は目だつものに気がひかれて、金雲母は黄金そのものではないかと思うのである。先に引用したモンターンの花崗岩についての説明の場合にも、少年の質問は、金雲母から始まっているのである。つまりフェーリックスは、アレゴリー的な見方をするのである。仮象に気がとられて、根拠づけることを忘れていく。それに対して、ヴィルヘルムは象徴的な物のみかたをしている。足許に氣をとられる息子とちがって、父親の方は、遠方をみ、自分を客観化することを知っている。子供は主観的なのである。この金雲母に目をうばわれることは小箱の外観が黄金で作られているようにみえるのと平行している。それだけでは、みた目に輝いていても、内容の空虚な仮象にすぎないのである。また前に「巨人の城」について子供たち（フィッツ少年とフェーリックス）はこれを人工的なものと思ったのに対し、ヴィルヘルムは、自然の作りであるとみていたわけであるが、その観方の根底にも、根拠づけられる象徴的な見方をしているのである。このように体験の伴わない子供たちは、見方がアレゴリー的なのである。それに対して、モンターンは勿論、ヴィルヘルムも、経験を積んでいるので、物事を根拠づけてみるのである。象徴的な態度をとるのである。ここに大人と子供の態度に根本的な相違があるが、この相違は子供たちに教育の問題として関連しあってくる⁽⁵²⁾。だから教育の問題も、仮象的アレゴリー性を根拠

づけ、象徴的な態度がとれるように指導しなければならないのである。

フェーリックス少年におけるアレゴリー的な要素をみたので、ヨゼフ二世の聖家族のもとで、彼の友だちになったフィッツ少年について少し考えてみたいと思う⁽⁵³⁾。エムリッヒは彼について、地の精のような存在といっている。確かに実在する少年というのではなくて、アレゴリー的な存在で、彼は、ゲーテがオイフォオリオンについて、時間と空間を超えているのであると語っているが、そのような存在である。勿論、オイフォオリオンはボエジのアレゴリーとして、ファウストとヘーレナの子供であるから、フィッツ少年は、とてもそういう存在ではありえない。ただその行動だけが、神出鬼没なのであって、この少年の足取りを辿ることはできない。空間、時間を超えているのである。彼に関して重要なことは、この少年が小箱の鍵を持ち出しているとしたか考えられないことである。なぜなら、いたずらわるふざけをして、上着を失ってしまうのであるが、そのポケットに鍵が入っていたのである。このえたいの知れない少年には何か危険要素が含まれているように思われる。勿論素人はわからない。エムリッヒは彼を善悪を超えた存在であるともみている⁽⁵⁵⁾。

しかしフィッツ少年が危険な存在だとしても、なぜそのような性格をもつのか、その少年からは、理解することができない。なぜならこの少年は、アレゴリーの偶然的産物でしかなく、むしろ危険なものを取り扱うために、そのように描かれているにすぎないだろう。ではその危険なものとは一体何であろうか。それは小箱の鍵である。鍵が危険性をもつことは、小箱そのものが、危険な要素をもっていると考えなければならない。おそらくフィッツが、手に負えない少

年なのは、行動が偶然でしかない子供だからというだけではない、鍵の危険さと関連して、いっそう不思議な少年に描かれているのである。そこへゆけばフェーリックスは、少年であるから、行動に偶然性が多いが、それらは一つ一つ根拠づけられて、成人しなければならぬ存在である。もつとも、この人生体験において、フェーリックスは、無事通過するように描かれていないけれども。

「巨人の城」に関連した項目で、危険性をおびているのは、火山岩の玄武岩である。フェーリックスの、「世界が一度にできたの」という質問には、火成説の急進的な過激の思想が含まれている。モントーンは、その質問を避けて、花崗岩の話にもどし、その永遠なることを説いたのであった。しかしフェーリックスは、そのような固定したものより、動的な活発さにひかれる。彼の行動には暴力がぬけきれない過激なものを思わせる。

劇『ファウスト』の中で、水成論のターレスと、火成論のアナクサゴラスの討論の場面は有名であるが、『遍歴時代』では、火成論の話は、山の人々の火祭という、象徴的な手法で語られる⁽⁵⁶⁾。ゲーテの中では、行動をめぐって、このあい反する行動形式が、問題になっているようである。勿論の後期のゲーテは、水成論的な立場をとっていた。そのような穏健な立場から、小箱の危険性に、フェーリックスが傷つくように描かれるのではないだろうか。

創作ノートに記された項目の中で、「巨人の城」そのもの、つまり洞窟という問題がなお考察されなければならないだろう。前にフィッツ少年が、宝探しの興味があつて、小箱をどこからかもつてきて、「巨人の城」の中に置いたのではないかという、トゥルンツの説明を引用したが、ゲーテにとって地下は、宝探しのモチーフだけに限

られていない。モンターンはこんなことをいつている。「小人たちが、鉱脈に魅せられて、岩を掘りまわし、大地の奥へと道をつけ、あらゆる方法で最も困難な課題を解こうとする場所は、知識欲のある考える人間が席を占めるべきところである」地下は、鉱脈という宝物と同時に考える人間の占めるにふさわしいところであると、いつているのは決して、偶然的の意味のないことではない。なぜなら、ファウストがヘーレナを連れてこようとする「母たちの場」は、地下にあるのであり、それはオルフォイスのモチーフであるが、大地の重さで、思考が、どれほどの緊張に耐えられるかを象徴的に語っているのである。従って地下の中の圧力は、思考に課せられた重さなのである。フッサールは、この「母たちの場」を、認識問題として捉え、純粹な意識の世界であると述べている。フッサールは、「母たちの国」に、おおよそ、現象学の問題と考えられる、ほとんどの概念を使つて、一気に様々な可能性を述べている⁽⁵⁹⁾。それらのすべての概念が妥当するかどうかは別として、この現象学者が、「ファウスト」第二部第一幕の「母たちの場」、すなわち地下の奥に、興味を示していることは、ヘーレナの存在を、「事象そのもの」として、直観された存在として、意識において捉えられた存在として、考察できるのではないかという点で、極めて暗示に富んでいることであるように思われる。地下が考える人間の占めるべき位置として、体験された、意識の領域であるとき、この洞窟の中の暗闇は、人間と関連するとき、意識の領域であると捉えてもよいであろう。エムリッヒは、シュタイン夫人に宛てたゲーテの手紙の中から、洞窟は、感情を表わす、といっている⁽⁶⁰⁾。この感情という言葉は、意識という言葉に置きかえ

てもよいと思う。更に彼は洞窟が、ゲーテに取って、様々な可能性をもっていることを指摘している。そして洞窟の中には、つねに宝物によって象徴されるような色々なものが示されている。

洞窟は、中が、空っぽであるから、人が住むわけである。創作ノートには、古代の穴居人の生活のことも書いてあったわけである。そのような洞窟には、社会性が、あるといわなければならない。またエムリッヒは、洞窟というのは、アラビア人、それにギリシア人も常に関心をもっていたことを述べている。プラトンの「洞窟の比喩」も、決して、その伝統からはずれたものではなかったらう。先に他の自我との出会いは仮象性を生み、その仮象性を根拠づけるのは、相互主観的な考察をしなければならぬことを述べたのであるが、洞窟に映る影は、認識問題に離れない仮象性のみではなく、社会性における仮象性も一つになっているように思われる。もともと、「巨人の城」の内部における「洞窟の比喩」との類似性は、直接認めることはできないけれども、社会性をもつ穴居人たちの生活も、何かアレゴリー的な仮象性を思わせるのである。

洞窟が空っぽなのは、小箱の中が空虚かもしれないと考えると類似性をもつ。つまり、洞窟は、一方では、花崗岩や玄武岩に通じ、他方では小箱に通じている。その結果、洞窟は、岩石と小箱の中間に位置していて、小箱の可能性を考えるのに一つの手掛りになるようにも思われる。洞窟の中は、意識の圏内とも考えられたのであった。そして、古代人たちはその中で生活していたのであるから、小箱にも、生命のモチーフが盛れているかもしれないのである。なかでも、最も興味深いのは、洞窟の中が、意識の圏内であるということであり、その圏内がそっくり、小箱の中に移されて、そこで現象

学的に考察してきたこれまでの論点を明確にしてくれるように思われるのである。

以上が小箱の来歴を追うために、創作ノートに書れていた、項目を中心に問題を考えてみたのである。しかし小箱の問題としてみれば、象徴する外観と、象徴される意味内容とが異なっているわけだから、象徴問題としていかに必然性が求められても、その説明はできなかつたのである。確実にこれらが小箱の外歴として、その可能性をもつとはいえないだろう。以下、小箱の象徴の展開が、フェーリックスに係りあつて、『遍歴時代』の中に登場するのを検討して、小箱の象徴性を考察してみたい。

小箱はいわば書れざる本であり、それを表わす文字がないと述べたが、これから問題にする、フェーリックスとヘルジーリエの恋愛の物語も、全く、普通の意味では表現されていない。『遍歴時代』には様々な、ノヴェレがあつて、たいてい、恋愛の話は、この形式を取っているのに、なぜ、フェーリックスとヘルジーリエの恋愛の物語だけが、他の場合と異なつて十分な表現がなされなかつたのだろうか。それは、フェーリックスが、『遍歴時代』の重要なテーマを荷っているからばかりでなく、この小箱のために、そういう表現になつたのだと思われぬ。ノヴェレとなつて、『遍歴時代』の全体の中で小さくまとまるのではなく、むしろ断片として、小説全体に係りあっているからであろう。そのような断片でありながら、この恋愛の話が、他の場合と違ふのは正しくこの小箱の象徴性によつてとしか考えられない。表現法からいえば、二人の恋愛の話は、フェーリックスがヘリジーリエの邸宅に留まっている間のみ、客観的に描写されるだけである。後は、小説の展開につれて、何度か、ヘルジーリエ

から、ヴィルヘルムに宛てた手紙によつて報告されるだけである。彼が彼女の屋敷を出た後では一度も客観的な表現はないのである。つまりこのことは小箱の象徴性と密接に関係しているものであり、象徴するものと象徴されるものとの相連性は、決して、前者と後者の関係が、文字で表わすことができないという点においてしか理解することができない。結局このことは、本来ならフェーリックスとヘルジーリエの恋愛は、一つのノヴェレに納まるのではなくて、長篇小説になりうる可能性をもっているのであるが、そのような一般的な展開をとげないのは、その展開が普通の文字では表わすことができないので、還元されてしまい、ただ、側面だけが、ヴィルヘルムに宛てた手紙という形で残つたのではないだろうか。表現されたのは「事象そのもの」なのであり、判断中止されて、その後に残つたもののみが、表現する言葉なく、断片のようになって、僅かに跡をとどめているにすぎないのではないだろうか。そして書かれざる本こそ、この小箱であり、文字が還元されて、中に置かれてしまった結果、後者は、小箱の外観しか見ることができないのである。つまり、父ヴィルヘルムに宛てた手紙とは、小箱のことしか書かれていないのであり、愛はその小箱という記号によつて綴られているにすぎないのである。小箱は、フェーリックスとヘルジーリエの、書れざる長篇小説であり、ノヴェレのような、愛という出来事を通して二人が描かれるべきではなくて、小箱に係りながら、この恋愛は、二人の内的な生き方が表現されるべきだつたのではないかということである。

ではなぜ小箱が、フェーリックスの恋愛という問題でこれほどまで強く係りあっているのだろうか。それは、『遍歴時代』の小説が諦

観を扱うのだとすれば、恋愛が最も自己放棄しがたいからである。いや、自己放棄したのでは、恋愛が成立しないのである。何ら外的規定をもたないで、主観性を捨てたのでは、恋愛そのものが消滅してしまうからなのである。ゲーテにとって恋愛が大きな問題であればあるほど、この小箱が威力をもつはずのものである。

本来なら一つのノヴェレに納められて、きちんと表現されるはずの、フェーリックスの恋愛が、小箱の象徴性において、捉えられたので、枠をみだして、書れざる長篇小説となったという推論は、象徴するものと象徴されるものとの相連性からみれば、当然そのような断片の形しかあたえられないように思わなければならないだろう。しかしそれこそ小箱の象徴性の展開に外ならないと思われるのである。表現されたのは、恋人の、それも父に宛てる形で、書きとめられた手紙に外ならないということは、表現の形式から検討しても、普通ならば理解しにくいことであろう。『遍歴時代』の表現形式は、粹物語、ノヴェレ、日記、詩、手紙そして長篇小説としての客観的な描写も入れると、実に多彩になるといわなければならない。ところが、これらの表現法の中で手紙の占める位置は、極めて高いといわなければならない。まず、ウィルヘルムが妻ナターリエに語るのはいずれ手紙においてである。次にマカリーエと姪や駐の間も、普通の小説におけるような会話とか、客観的な描写で表現されることはまずないのである。ここに挙げた例を考えてみるだけでいかに重要な役割を手紙が果しているかがわかる。手紙は会話と同じように主観的な表現形式である。ゲーテは『遍歴時代』において、普通の客観的描写では表現できない「事象」をあえて書こうとしていたのではないだろうか。ナターリエやマカリーエは、小箱と関連しない

にもかかわらず、小箱に関する報告が、山岳地帯を降りて、ウィルヘルムの手を離れた後はすべて、ヘルジーリエの手紙に報告されるのと同様の表現形式をとるのは大変興味深いことである。このことは逆に、小箱の象徴性をもって、なぜ、マカリーエやナターリエに手紙を書くのが検討されるように思われる。すなわち、長篇小説の最も重要なところは、手紙で表現し、客観的な表現一般で述べられるのは、粹物語やノヴェレにすぎないということになるのではないだろうか。しかしマカリーエについてはこの考えがすべて適用されるわけではない。なぜなら、彼女の主要な問題は、始んで、第一巻十章と第三巻十五章において、手紙ではなく、述べられているからである。しかし手紙が大変重要な役割を果していることは十分納得できると思う。

書れざる長篇小説は、表現されて、手紙になったと、小箱の象徴性は教えてくれる。なぜなら象徴するものと象徴されるものとは異なっていたのであるから。従って、表現された手紙の象徴性は、小箱にふれて、それとは異なる長篇小説であると主張することは当然できるはずである。表現されたものと、意味内容が異なるからである。手紙は、沈黙によって判断中止され、文字をうばわれた「事象そのもの」であり、それは小箱の象徴性において、長篇小説でありうるのである。

書れざる小説といっても、それは文字を使って表現されなければならない。人間は文字という仮象を通してしか、還元されたものを読みとることができないから。このところに小箱のすべての難かしさがあるのだ。

小箱の外観については、可成り詳しく述べたのであるが、それに

はある雰囲気に伴っている。不安のようなその雰囲気はどこからくるのだろうか。発見された場所、「巨人の城」の様子を通して次のように描写される。「柱はフェーリックスにとって、前よりもいっそう黒く、洞窟はいっそう深く思われた。秘密が彼に課せられた。所有することは、正当なのか不当なのか」小箱の伴う不安のような雰囲気は、ある秘密が彼に課せられたからであると説明されている。この秘密のために少年の態度は、一変してしまふ。少年から青年へと成長する。彼は青年として諦観者ではない。父のヴィルヘルムは、息子が小箱のある洞窟の方にゆくのを好まない。また父は、フィッツという少年にも好感を抱いていない。若さというのはそういう一種の驕りがあるのだらうと思われる。

山岳地帯を降りて、ヘリジーリエに最初会うのは、「伯父」とのみ呼ばれる人物の、大農園においてである。この邸宅には二人の姪がいて、彼よりも年上であるが、妹の方がヘルジーリエである。情熱のために、彼は、果物の皮をむく小刀で指を切ったり、馬に乗って二人は出かけるが、彼が馬上から落ちたりする。教育州に入って、彼が離れていても愛は変らない。小箱の方は、父のヴィルヘルムが最初持っていたのであるが、遍歴の邪魔になるということもあって、小箱を前述した老集収家にあづける。トゥルンツなどは、これは、遍歴という変化にさらされた生活のため、小箱は不変性を表わすので、保管されるのであると述べている。しかし小箱が教育州の始まる前章といつても、第一巻の終章で、教育州は第二巻一章で始まるから、保管されることに意味はないのであろうか。確かにこれまでに検討したように、山岳のシンボルと教育の問題が関連していたのに、教育州には持ち込まれない。エムリッヒは教育州と関連することは

認めている⁽⁶⁷⁾。その後第三巻二章まで小箱は姿をあらわさないが、ここで例のフィッツ少年の置き忘れたポケットから鍵がみつかる。第三巻七章で、前にヴィルヘルムがあづけた老鬼集家が死んで、小箱は、ヘルジーリエのもとに来る。ここで「伯父」とのみ呼ばれる人物が、それを手に取るが全然関心を示さない。この人物は、合理主義者のアレゴリーであるから、小箱の提起する問題にはふれあわないのである。このようにして、ヘルジーリエの手に、小箱と鍵が渡された後で、それも『遍歴時代』の終りから二番目の章で、フェーリックスの破局がおこるのである。小箱の蓋を鍵で開こうとすると鍵が折れるのである。そして、「⁽⁶⁸⁾ぼくは小箱も鍵も関係ない。ぼくが開きたいのは、あなの心なのです」といって、破局を迎える。ヘリジーリエは、彼を拒み、彼は馬に乗って、駆けてゆき、川の中へ涯から転落する。傷ついた彼を、外科医になっている父親が救う⁽⁶⁹⁾。要約すると小箱の物語はこれだけである。もっとも、最後に小箱の蓋は老人の心得で、開くのであるが、それは後述して、この小稿をまとめた。

フィッツ少年の上着のポケットから偶然鍵がみつかる、それを使い、無理に小箱の蓋をあけようとして、鍵が折れ、馬に乗って突進するフェーリックスの話までが、ヘルジーリエから、ヴィルヘルムに宛てて、手紙で報告される内容である。このような内容の部分は、本来、ノヴェレなどにまとめられるのではなく、一篇の長篇小説にも匹敵するものに展開すべきであると述べたのであるが、それは小箱の象徴性の仕方から考えたのであった。小箱の主観性から、客観的に必然性をえて、超越論的に自己を構成するという方法で象徴機能を果せば、当然、断片的にしか、手紙で報告されない内容も、

十全の展開をとけてもおかしくないのだと思う。しかしそこには、もし長篇小説が、『遍歴時代』の中に置れたのでは、他の色々な要素をもつものが同居しなければ、人間の様々な現実の姿が捉えられなくなるという外的な理由もある。事実、『遍歴時代』の中に置かれるべくして草案された物語で膨大になり、この枠を飛びだした小説に『親和力』がある。しかしそのように長大にならなくとも、この小説の中に位置を占める方法があるとすれば、それは小箱の象徴で描かれるより外になかったのではないだろうか。この外的な理由からも、フェーリックス、ヘルジーリエの恋愛は、長篇小説になりえる可能性があると思われる。小箱の象徴性で描かれたからこそ、この小説の中に納めることができたのである。内容をそっくり小箱の中にその象徴性によって納める。小箱は、その内容を十分に作り上げて、中に入れるべきものであって、直接蓋を開けて、中から宝石を取り出すように持つてくることはできない。その点からいえば、小箱は単に空っぽであるにすぎない。人工的に制作された小箱としては、自律しえないので、外界と係りあって、自己を構成しなければならぬのである。その意味で、内容は、最初空虚であって、小箱そのものはアレゴリーでしかないといえよう。ところが、小箱の外にあって、小箱にその内容を作り上げて、中に納めるならば、その内容は体験されたものであり、生きたものである。そのような仕方小箱の象徴は生命を保っているのである。

A・ヘンケルの研究で、ゲーテにおける小箱の様々な場面を知ることができる⁽⁷²⁾。しかしこの小箱は、これまで検討したように、内容があるのかどうか判明しない点で、他のどの小箱とも異なっている。他の場合には、『遍歴時代』の中に置れている「新しいメルジーネ」

の話では、小箱の中に小人の女性が入っている⁽⁷³⁾。また『魔笛』第二部にも「箱の中の子供」が登場する。また『ファウスト』第二部一幕の「母たちの場」で、彼が手にして、母たちの国、地下から姿を現わしたとき、持ってきたのが香炉である。その中からヘーレナが現われる。しかしどの小箱も、中に内容を入れている。もう少し詳しくいえば、アレゴリー的に登場する、オイフォリアオンや、御者の少年、ミニヨンなどは、本来生きた存在ではないのである。それに生命をあたえるための枠の作用を小箱がしているのである。だから、決して、フェーリックスとヘルジーリエの恋愛に係わる、小箱は、それらと同一であるとはいえないのである。全く別物でなければならぬ。もし同様のものではあれば、小箱の中には、恋人のヘルジーリエが入っていなければならない。それでは「新メルジーネ」の話と同一になってしまう。この点から、小箱の独自性がはっきりする。決してそのような、アレゴリー的存在のために描かれた小箱ではないのである。内容は最初から中に存在しているのではなく、外界に真の体験を形成し、それを小箱に入れて、永遠なるものとしなければならないのである。この意味で、小箱の内容は自己構成的に形成されなければならないのである。

小箱は、フェーリックスに彼がそのように振舞ってはならないという仕方係りあいをもつ。この意味でソクラテスのデーモンのような性格がある。そうしてはならないという時あらわれて行動を制するあのデーモンのようなものである。なぜそのようにいえるかといえは、一度も小箱の蓋が開かないし、一度無理にあげようとして鍵を破わしてしまうからである。小箱にとってそぐわない行動をとるからである。このように、そうしてはならないという消極的な方

法で作用することを考慮すれば、先程疑問にした、なぜ小箱は教育州に入る前章で、美術蒐集家の手許に保管されるか解決がつく。小箱は不変性を示し、遍歴のテーマに合わないからばかりでなく、小箱が彼を監視する目のためでもある。すなわち、教育州で彼は、そうあつてはならないという行動はしないのである。諦観に即して教育されるところで小箱は彼をみはる必要はないのである。しかしだからといって、小箱が教育州の理念と矛盾するのではない。なぜなら小箱は蓋を開けないという方針で、教育州の外にありながら、教育州の理念に即して行動するかどうかを見守っているといえるからである。

ヘルジーリエが、「小箱はフェーリックスのものです。彼が発見し自分のものにしたのです」といっているが、果して、小箱は彼だけのものだろうか。教育州に入る前、ウィルヘルムが、美術蒐集家の手許にあづけたとき、かの老人は、「小箱は不思議な偶然で手に入つたのですから、それであなたの幸福をためすべきでしょう。あなたが幸福に生れついているなら鍵はみつかるでしょう」といっている。この点からみると必ずしもフェーリックスに限定されるのではなく、もっと普遍性をもっているように思われる。しかしそのような細部に目をくばらなくとも、小箱の蓋が開くところで、ゲーテにとっては、『遍歴時代』のすべての問題が小箱に関連しているのである。それは諦観のモチーフである。小説の中で、モンターン、マカリエとその他レナルドーなどを含めて、何人かの諦観者に出会う。しかし諦観そのものを具体的に示しているのは、すなわち「事象そのもの」として、諦観を示すのは、その小箱に外ならない。この小箱が蓋を開くところで、遍歴時代のすべての問題が一瞬のうちにこ

こに係わりあつてこの長篇小説が終るのである。その後フェーリックスが、涯から馬もろとも転落するのは後日談である。

フェーリックスが無理して、小箱を開けようとしたとき、鍵は折たかにみえた。しかしその後、ある老人、この老人は例の伯父にとつて尊い存在であるが、折れた鍵を手にとって、破れたのではなく磁石仕掛けになつてゐるのを発見して、なおした鍵を使い小箱をあけてみせるのである。しかしその開き方が問題なのであるが、その場面は次のように描写されている。「その男性は少し離れると、小箱は蓋が開き、すぐ彼は蓋を閉じます。そしていいました。そのような秘密には触れない方がよいと」小箱は傍を離れることによつて蓋が開くということは諦観を表わしている。それは説明ではなく、「事象そのもの」なのである。このような存在こそ、判断中止され、還元されたものに外ならない。それを具体的に直観できるのである。原現象といつてもよいのである。

小箱の蓋が離れることによつて開くことは小箱が外側を指示していることを意味する。象徴における諦観は外側を重視し、そのようたものの集計は世界性を根拠づけていると考えられる。そこに成立する象徴は *Sinnbild* として個体に密着した意味ではなく、世界性を外側に指示する意義 *Be-deutung* といふことができる。この概念によつて、小箱は諦観において態度変更された象徴性を個体の内部から、世界一般へと解放するのである。

Texte und Literatur

Goethes Werke in 14 Bdn, Hamburg

Goethes Werke in 143 Bdn, Weimar (Sanssya)

Goethes Werke in 24 Bdn, Artemis Verlag

Emrich, W.: Die Symbolik von Faust II, Athenäum Verlag

” : Das Problem der Symbolinterpretation im Hinblick
auf Goethes “Wanderjahre” (Deutsche Vierteljahrsschrift, 26.
Jahrg.)

Husserl, E.: Logische Untersuchungen II/1, Max Niemeyer

” : Husserliana Bd. III, Bd. XI

Hamburger, K.: Die Logik der Dichtung, Ernst Klett Verlag

Schmitz, H.: Goethes Altersdenken, H. Bouvier

Ingarden, R.: Erlebnis, Kunstwerke und Wert, Max Niemeyer

Staiger, E.: Goethe in 3 Bdn, Atlantis Verlag

Henkel, A.: Entsagung, Max Niemeyer

デリダ: 声と現象, 理想社 (高橋訳)

(1) ゲーテの作品フルテニス版第二四巻、六三六頁参照。

(2) 右同作品、四八頁以下。

(3) エムリッヒ: ファウスト II 象徴論、四四頁。

(4) ゲーテの作品第八巻、三四頁、なお以下ハンプルク版を記入せず

述べる。

(5) エムリッヒ: ファウスト II 象徴論、四五頁。

(6) デリダ: 五三頁。

(7) フッサール: 論理学研究、三二頁以下。

(8) ゲーテの作品、第十二巻、四七〇頁。

(9) ゲーテの作品第八巻、四三頁。

(10) 右同作品、四五八頁。

(11) ゲーテの作品第十三巻、五四二頁参照。

(12) ゲーテの作品第八巻、六一三頁。

(13) エムリッヒ: 象徴解釈論、三四六頁。

(14) ハンプルガー: 一二頁。

(15) ゲーテの作品第八巻、三〇四頁。

(16) 右同作品、三六頁以下。

(17) シュミッツ: 二〇四頁。

(18) インガルデーン: 四頁。

(19) フッサール: 全集第三巻、九八頁以下。

(20) ゲーテの作品第十二巻、四七一頁。

(21) 右同作品、同頁。

(22) エムリッヒ: 象徴解釈論、三三八頁。

(23) ゲーテの作品第八巻、三四頁。

(24) 右同作品、三三頁。

(25) ゲーテの作品第三巻、一四九頁。

(26) エムリッヒ: ファウスト II 象徴論、九一頁。

(27) ” : 象徴解釈論、三四八頁。

(28) ゲーテの作品第八巻、四〇頁。

(29) 右同作品、五七四頁。

(30) フッサール: 全集第三巻、九四頁。

(31) ゲーテの作品第八巻、四三頁。

(32) シュタイガー: ゲーテ第三巻、一四三頁。

(33) ゲーテの作品、六一五頁。

(34) ゲーテの作品、ヴァイマル版第一部25の2、二二六頁。

(35) 右同作品、一六頁。

(36) ゲーテの作品第八巻、一四六頁。

(37) ゲーテの作品、ヴァイマル版第一部25の2、一六頁以下。

(38) ゲーテの作品第八巻、四三頁以下。

ゲーテの『W・マイスター・遍歴時代』における小箱の象徴性について（佐竹正一）

- (39) エムリッヒ…象徴解釈論、三四五頁。なおトゥルンツの註解はゲーテの作品第八巻、六一五頁。
- (40) ゲーテの作品、ヴァイマル版第一部25の2、一六頁。
- (41) ゲーテの作品第八巻、三四頁。
- (42) 右同作品、同頁。
- (43) ゲーテの作品第十二巻、三一頁。
- (44) 右同作品、三二頁。
- (45) ゲーテの作品第八巻、五七五頁。
- (46) 右同作品、三一頁。
- (47) ゲーテの作品第十三巻、二五四頁。
- (48) ゲーテの作品第八巻、八頁以下。
- (49) 右同作品、一五頁。
- (50) 右同作品、一一頁。
- (51) 右同作品、七頁。
- (52) 右同作品、三二頁。
- (53) 右同作品、二九頁。
- (54) エムリッヒ…象徴解釈論、三四八頁。
- (55) “ “ “ “ 右同研究書、同頁。
- (56) ゲーテの作品第三巻、二二九頁以下。
- (57) ゲーテの作品第八巻、二五九頁以下。
- (58) 右同作品、三六頁。
- (59) フッサール…全集第十一巻、二二三頁。
- (60) エムリッヒ…ファウストII象徴論、二七頁。
- (61) “ “ “ “ 右同研究書、同頁。
- (62) ゲーテの作品第八巻、四四頁。
- (63) 右同作品、五〇頁。
- (64) 右同作品、五一頁。
- (65) 右同作品、七二頁。
- (66) 右同作品、六四七頁。
- (67) エムリッヒ…象徴解釈論、三四九頁。
- (68) ゲーテの作品第八巻、三二〇頁。
- (69) 右同作品、三七七頁。
- (70) 右同作品、四五七頁。
- (71) 右同作品、四五九頁。
- (72) ヘンケル…八九頁。
- (73) ゲーテの作品第八巻、三五四頁以下。
- (74) ゲーテの作品、アルテミス版第六巻、一〇九一頁以下。
- (75) ゲーテの作品、第三巻、一九八頁。
- (76) ゲーテの作品第八巻、三二一頁。
- (77) 右同作品、一四六頁。
- (78) 右同作品、四五八頁。